ミックスドリンクのアルコール度数を明らかにする計算方法

ミックスドリンクのアルコール量を計算するには、ベースとなるボトルを確認するだけでは不十分です。計算で重要なのは、どの液体が実際に計算に含まれるかです。

2026年11月9日（月）

ミックスドリンクの度数を見積もる

1 仮の例

スピリッツ：45 mL、40% vol.；
リキュール：15 mL、20% vol.；
ノンアルコールのミキサー：60 mL。
量は計測済み、度数は既知、
均一に混ざり、損失なし。



2 計算して合計

アルコール相当量 = mL ×
度数（% vol.）÷ 100。
スピリッツ：18 mL；リキュール：3 mL；
ミキサー：0 mL；合計：
アルコール相当量 21 mL。

18 + 3 + 0 =
アルコール相当量
21 mL

3 液体だけを数える

測定した最終容量を使う。
加わった水と溶けた氷は含め、
固体の氷やグラスの容量は含めない。
概算なら明記する。



4 最終容量で割る

推定度数 = アルコール相当量の合計 ÷
最終液量 × 100。最終 150 mL なら：
21 ÷ 150 × 100 = 14% vol.



5 水が増えても、アルコールは同じ

最終 210 mL まで薄めると、
推定は 10% vol. に下がる。
飲用も損失もなければ、
アルコール相当量 21 mL はそのまま。



6 見積もりは測定ではない

アルコール量と容量は同じ混合液に
対応していなければならない。
この計算は度数を証明するものではなく、
血中アルコール濃度を予測するものでも、
安全に運転できるかの判断にも使えない。



VINETUR

この仮定の例では、薄めることでアルコール度数は14% vol.から10% vol.に下がりますが、純アルコール換算量21 mLは変わりません。計算結果は推定値であり、分析による測定値ではありません。 AIで生成された学習用イラスト。

ミックスドリンクのアルコール度数は、ベースとなるボトルを見るだけでは計算できません。実用的な目安を出すには、すべての材料に含まれるアルコール量を合計し、希釈分を含む仕上がりの液量で割る必要があります。この家庭でできる計算は、グラスに注がれたドリンクの値にかなり近づくことがありますが、あくまで推定であり、認証された分析測定値ではありません。

ミックスドリンクのアルコール度数が実際に意味すること

ドリンクに「14% vol.」と表示されている場合、その割合は、ドリンク100mLあたりアルコール換算でおよそ14mLを含むことを示します。ただし、この表示だけではグラス全体に含まれるアルコール量はわかりません。総量は提供される量にも左右されるためです。同じ度数でも、少量のドリンクと大きなドリンクでは、含まれるアルコール量が異なることがあります。

これはカクテルで特に重要です。ボトルに表示された度数が、そのままミックスドリンクの度数になるとは限りません。リキュール、ベルモットなどのアルコール飲料やその他のアルコールを含む材料に加え、ジュース、ソフトドリンク、水、すでに溶けた氷も混合液の一部だからです。したがって、ミックスドリンクの「実際の」度数を知りたいなら、ベースとなるスピリッツだけでなく、ドリンクの最終的な組成を確認する必要があります。

まず、混同されがちな2つの考え方を分けておくとわかりやすくなります。アルコール度数は濃度です。総アルコール量は別のもので、提供される液体全体にアルコール換算で何mL含まれているかによって決まります。水を加えると度数は下がりますが、アルコール量そのものは減りません。

各材料の量と度数を書き出す

計算を始める前に、目安を知りたいドリンクについて4つの情報を集めましょう。使用したアルコールを含む各材料の量（mL）、それぞれの度数、加えたノンアルコールの割り材の量（mL）、そしてドリンクの仕上がりの液量です。仕上がりの液量がわからない場合は、少なくとも概算し、その結果がその仮定に基づくことを明示する必要があります。

カクテルの名前やベースとなるスピリッツがわかっているだけでは不十分です。同じ名前のドリンクでも、配合の比率や銘柄、加えるリキュールが異なることがあります。また、アルコールはベーススピリッツだけに含まれるわけではありません。見落としやすくても、ほかのアルコールを含む材料も計算に含める必要があります。

実用上のルールは簡単です。実際に使った製品の数値を使いましょう。すべてのリキュールやスピリッツが同じ度数であるかのように、種類だけから度数を割り当ててはいけません。その数値がわからない場合に示せるのは、明確な仮定に基づく推定値だけです。提供されたドリンクを確実に表す数値として示すことはできません。

計算する前に

- アルコールを含む各材料の量（mL）

- それぞれの実際の度数（% vol.）
- ノンアルコールの割り材の量（mL）
- ドリンクの仕上がりの液量

3段階の計算：求めて、合計し、割る

この方法は、体積パーセントの定義に基づいています。まず、アルコールを含む各材料がもたらすアルコール換算量を計算します。次に、それらを合計します。最後に、その合計を仕上がりの液量で割り、100を掛けてミックスドリンクの推定度数を求めます。

ステップ1。アルコールを含む各材料について、アルコール換算量＝材料の量（mL）×度数÷100。40% vol.のドリンクを45mL使う場合、計算は45×40÷100＝アルコール換算量18mLです。度数を小数の0.40で表す場合は、45×0.40＝18となります。重要なのは、100で2回割らないことです。

ステップ2。アルコールを含む材料がもたらすアルコール換算量（mL）をすべて合計します。ノンアルコールの割り材もドリンクの一部ですが、分子に加える量は0です。

ステップ3。その合計を混合液の仕上がりの液量で割り、100を掛けます。推定度数（% vol.）＝アルコール換算量の合計÷仕上がりの液量×100。たとえばmLのように、すべての量を同じ単位でそろえる必要があります。

重要な条件が1つあります。分子のアルコール量と分母の液量は、同じ混合液に由来する値でなければなりません。仕込み全体のアルコール量を、提供した一部の液量だけで割ることはできません。また、シェーカーにこぼれたり残ったりした液体がある場合、仕込み時のアルコール量をすべてグラスのドリンクに含まれるものとして扱うべきではありません。混合液が均一なら、残った液体も同じ濃度です。誤差が生じるのは、仕込み全体のアルコール量と、その一部だけの液量を組み合わせたときです。

基本の計算

1. アルコールを含む各材料の量（mL）に度数を掛け、100で割る
2. アルコール換算量（mL）を合計する。ノンアルコールの割り材が加える量は0
3. 合計量を同じ混合液の仕上がりの液量で割り、100を掛ける

使う液量：液体と、すでに溶けた氷を数える

計算式の分母に使うのは液体の量であり、グラスの容量や氷が占める空間ではありません。グラスの容量が300mLでも、ミックスドリンクの液量が300mLという意味にはなりません。また、使った氷をすべて液体として数えるべきでもありません。ドリンクに溶け込み、液体の一部になった水だけを数えます。

氷が溶けるにつれて組成が変化するため、この違いは重要です。提供後もドリンクが氷に触れていれば、アルコールの総量はそのために増減しなくても、濃度は時間とともに下がり続けることがあ

ります。そのため、最も役立つ推定値は、想定する時点に合わせて求めたものです。

仕上がりの液量を測れるなら、材料の量と推定した水の量を単純に足し合わせるより、その測定値を使うほうが通常は適切です。測定できず、液体の量と推定した希釈分を合計して分母を概算する場合は、そのことを明確に伝えましょう。その分だけ、結果も概算になります。

もう1つ覚えておきたい点があります。水とエタノールを混ぜても、最終的な液量がそれぞれの開始時の量を正確に足した値と一致するとは限りません。こうした混合液では体積収縮が確認されており、測定条件も影響します。家庭での計算に、どのカクテルにも当てはまるかのような固定の補正値を使うのは適切ではありません。仕上がりの液量を測定できるならその値を優先し、得られる数値は実用的な推定値であって、実験室での測定値ではないと考えるのが妥当です。

もう1つ、わかりやすい限界があります。液体の一部がシェーカーや氷の間、あるいは濾す過程で残ることがあります。仕込み全体のアルコール量を、提供した分だけの液量で割れば、その値はグラスの濃度と一致しません。これは計算方法が成り立たないということではなく、計算に使う数値が、評価する仕上がりの液体を本当に表しているかどうかに結果が左右されるということです。

仮定上の例：ドリンク150mLにアルコール21mL

仮定上の配合として、40% vol.のスピリッツ45mL、20% vol.のリキュール15mL、ノンアルコールの割り材60mLを使うケースを考えてみましょう。そこに水を加え、仕上がりの液量を実測で150mLにします。この例は、量を実測していること、度数がわかっていること、混合液が均一であること、ロスがないことという4つの明確な前提に基づいています。これは検証済みのレシピでも、実際に測定したドリンクでもありません。

それぞれの材料がもたらす量を計算します。スピリッツは45×40÷100＝アルコール換算量18mLです。リキュールは15×20÷100＝3mLです。ノンアルコールの割り材は0です。合計すると、混合液にはアルコール換算量が21mL含まれます。

この分子を使うと、ミックスドリンクの推定度数は21÷150×100＝14% vol.となります。この14% vol.は、仕上がりのドリンク150mLに占めるアルコールの割合を表します。ドリンクに含まれるアルコールが14mLだけという意味ではありません。合計21mLのアルコールが、より大きな液量に分散しているということです。

重要な点に注目してください。この例では、水を正確に30mL加えたと主張する必要はありません。確定しているのは、仕上がりの液量を実測した150mLという値だけです。このように考えることで、材料の開始時の量が常に正確に合計されるという仮定を避けられます。

項目	データ	結果
スピリッツ	40% vol.で45mL	アルコール換算量18mL
リキュール	20% vol.で15mL	アルコール換算量3mL
割り材	アルコールを含まない60mL	0mL
仕上がりの液量	均一な混合液で、ロスのない状態で実測した液量150mL	21÷150×100＝14% vol.

水を増やすと10% vol.に下がるが、アルコール量は変わらない

同じ仮定上の混合液を使い、アルコール換算量は21mLのまま、飲んだりこぼしたりすることなく、仕上がりの液量を実測で210mLまで希釈したとします。計算は21÷210×100＝10% vol.となります。

この比較から、濃度と総アルコール量の違いがわかります。最初のケースでは、アルコール21mLが150mLに分散しており、度数は14% vol.でした。2つ目のケースでは、同じ21mLが210mLに分散しているため、度数は10% vol.に下がります。水は濃度を下げますが、混合液にすでに含まれていたアルコールを取り除くわけではありません。

この区別は、ミックスドリンクを解釈する際に役立ちます。希釈されたドリンクは計算上の割合が低くなりますが、分子が変わっていないなら、総アルコール量まで少ないものとして扱う根拠にはなりません。

推定の限界：計算は分析ではない

家庭での結果を「実際の」値と呼ぶのは、実用的な意味に限られます。つまり、数値が材料、希釈、対象とする液量を正確に反映しているほど、実際に提供されたドリンクの値に近づきます。これらの要素のいずれかが不明なら、正直な示し方は、認証された正確な度数ではなく、明示した仮定に基づく数値として提示することです。

計算は分析ではありません。国際法定計量機関（OIML）が説明するアルコール計は、水とエタノールの混合液を対象に設計されています。カクテルには糖分、酸、着色料など、密度に影響する化合物が含まれていることが多いため、単純な測定値を自動的にアルコール度数と解釈することはできません。屈折計にも同様のことが当てはまります。1回の測定だけでは、アルコールに由来する値と糖分などの成分に由来する値を切り分けられません。

国際ブドウ・ワイン機構（OIV）の分析法は、その理由を理解する助けになります。引用されている資料はワイン分野のものですが、より広い原則を示しています。分析による測定には、管理された手順と試料に適した方法が必要です。これは家庭での計算を否定するものではなく、根拠のある推定として適切に位置づけるための説明です。

最後に、明確にしておくべき限界が1つあります。ミックスドリンクの組成を計算しても、個人の血中アルコール濃度を予測したり、運転しても安全かどうかを判断したりすることはできません。体の反応は、この計算では測定できない多くの要因に左右されます。

計算は分析ではない

水とエタノール用のアルコール計だけでは、糖分やその他の化合物を含むカクテルの測定には不十分

屈折計の1回の測定だけではアルコールと糖分を自動的に切り分けることもできません。試料に適した方法が必要です